

サイト 2. ダークルーム：身体的理性と人工的エロス

本誌「Glass Bead」は創刊号（サイト 0.）で、ヘルマン・ヘッセの『ガラス玉演戯』（1943年）に出てくるさまざまな学問や芸術を追究する理想郷「カスターリエン」を取り上げた。¹ この風変わりな小説でヘッセが描いたカスターリエンとは、知識をこの上なく芸術的かつ遊戯的な知識のための知識と見なしてさまざまな知識の頂点を追究する場であり、選ばれしエリートたちがあらゆる分野の知識の発展に身を捧げ、混沌とした実社会からもその政治的影響からも完全に隔離されて禁欲的に暮らす施設だ。創刊号で「カスターリエン」を取り上げたのは、知識や権力に対する非明示的否定と解釈される現代アートの惨状を訴えるのに最適と考えたからだ。惨状というのは、ネオリベラルな資本の前に破綻していること、一般的な批判の機能をもたないこと、過激姿勢に中身がないこと、皮肉が陳腐なこと、そして理性や目的が認められない状態のことだ。そこで本誌はまず「カスターリエン」の印象を変えるべく、アートのエンターテインメント性と哲学や科学、政治との関係を再考するには、学際的な理性の見直しが必要だと訴えた。本誌第 2 号（サイト 1.）ではさらに、理性の従来イメージを払拭すべく、アートは人工的に自由を構築することに対する批評的媒介であるという主張を中心に、コンピューター文化やコンピューターの認識論に焦点を当てた。どちらの号でも、哲学的・科学的な理性を抽象概念や客観的叙述であるとする月並みな表現は使わないことにした。とはいえ、知識の状態にばかり目を向けると、身体とその政治性が乖離してしまう。

そこで今号（サイト 2.）では、具現化された思考という具体的な状態へと立ち戻ることにした。身体に対する批評の歴史的なとらえ方の評価から状況化された知識を巡る現代的問題の調査まで、進化した人間もどきのセックスロボットとの出会いを題材にした演劇の芸術的・政治的経済活動の分析からアルゴリズムが性的関係の意味合いを変えつつある状態まで、恋活習慣が支配的な建築論や都市論をむしばんでいる状態から特定のアート様式の作品の性的経済活動まで、今号では性愛と理性を分ける境界線を取り上げる。ここで論じるのは、現代の愛やセックス、生殖を巡る劇的な変化は、既存の（生物学、心理学、アイデンティティ政治学などの）推論的枠組で対処しきれるような副次的な問題などではなく、学際的理性という新解釈を発展させる上で不可欠な変革を起こす媒介だということである。

ダークルーム

岡山芸術交流 2019 Okayama Art Summit（タイトル：「IF THE SNAKE もし蛇が」 アーティストディレクター：ピエール・ユイグ 開催期間：2019年9月27日から11月24日）の一環として発行した本誌今号は、日本映画史に衝撃を与えた作品である原一男監督の『極私的エロス・恋歌 1974』から部分的にインスピレーションを得ている。あけすけかつ暴力的な三角関係を描いたこの映画は、急進的フェミニスト（監督の元妻、武田美由紀）の究極のポートレートである。武田はシングルマザーである自分自身をさらけ出すことで日本社会のタブーを大胆に打ち破り、レズビアン恋人とおおっぴらに喧嘩し、だれの手も借りずにアフリカ系米兵との間の私生児の女兒を出産し、その一部始終をカメラに収め、男たち全般、とくに米兵た

ちに説教するために沖縄のナイトクラブに乗り込み、原の新しいパートナーであり録音技術者でありプロデューサーである小林佐智子の前で悪びれることなく原をこき下ろす。

『極私的エロス』の意義は大きい。というのも、今でこそ暮らしにソーシャルメディアが浸透しているが、映画的見方の打破という、この作品が撮影された当時はまさに画期的だったことを成し遂げているからである。原のカメラが写す「あからさま」な親密な性的関係は、今となつては男のあからさまな標準的な見方とその打破と思われるものの表象でもある。カメラとそのエンターテインメント性について言うことをたえまなくこころ変える武田の肉体を容赦なく撮影することで、原はこの作品を観る者にとって主体が客体化したり、主体化した者が客体となったりする実験的映画にしている。そうすることで、『極私的エロス』は親密な関係を封じ込める「ダークルーム」になり、「ダークルーム」という記録装置を使って現状を打破し、それによって多様な選択肢を提示しているのだ。

今号では、「ダークルーム」を複数の意味をもつ場として扱っている。ほとんどは文字通りの意味で、果たす機能によって定義された二種類の場所を指す。ひとつめは、ゲイたちがパートナー探しをする地区の建築上の特徴から名づけられた名称だ。そこは好奇の目にさらされることなく世間とは志向が異なる人たちが集まる異色の場で、個々人の志向を自由にさらけ出し、肉体が思いがけなく出会う場所である。ふたつめは、前述したように写真を現像したり、被写体をフィルムに焼き付け、露出・現像・公開したりする、機械装置でかなえるのぞき趣味と不可分の場所だ。心理学的な意味で、ダークルームは生殖や抱卵の場所とも考えられ、ジークムント・フロイトは子宮を典型的なダークルームと見なし、フロイトの同業者でハンガリー人のフェレンツィ・シャーンドルは妊娠初期の子宮を海と見なすことで論を進めた。このような隠喩的な意味で、ダークルームはきわめて優れた「ブラックボックス」、認識的不確実性の領域であると考えることができる。わたしたちに気づかれないように身を隠し深く潜行してられる領域である。結局のところ、ダークルームが象徴するものとは、隠され口にされないものであり、無意識のうちに抑圧されたり意図的に隠されたりするものであり、願望と性的行為の曖昧さ、もしくはその曖昧な構造なのである。

生殖細胞

研究によると、今日の真核生物は 99.9%以上が有性生殖をする。バクテリアから最も高等な霊長類まで、セックスはたいてい繁殖の一環である。つまり人類は、たびたび指摘されることだが、生殖目的にかぎらずセックスする例外的生物なのだ（ただし、人間同様、社交目的のセックスをする種は少なくとも他にも 2 種、ボノボとイルカが存在する）。初期人類が社交目的のセックスから、タイプとトークン（たとえば、社会的役割で標準的に定義する花嫁がタイプであるのに対して、社会の再生産を効率化する社会的技術である原始時代の通貨である貝殻はトークン）による標準的規範に移行した理由が何かという問題は、まだ盛んに議論されている。だが確かなのは、人間の性交にセックスと生殖の関係がつかまとうのには、生物学的のみならず社会的・歴史的な理由があるということだ。たいていの場合、たえず再構築されるセックスと生殖の関係性は、次世代に伝える遺伝子上の問題であるだけでなく、領土、経済、イデオロ

ギー、社会、文化などさまざまな目的を内包する問題でもある。逸脱と見なされるセックスに対する強い反発は、ほとんどの場合が性交と生殖の結び付きを頑なに守ろうとする欲求から生じている。同性愛から無性愛（Aセクシャル）、トランスジェンダーにいたるまで、逸脱や異常とされる性的志向はたいてい生殖から切り離されているという点に基づき定義されている。

1970年、アメリカの急進的フェミニスト、シュラミス・ファイアストーンは、真のフェミニズム革命は人工的な生殖手段が出現し、女性が妊娠という重荷から解放されてはじめてなされると主張した。「女性の抑圧の中心は、女性が子を産み育てる役割であること」**2**だと考え、ファイアストーンは自然生殖をしなくてすむ技術の開発を呼びかけ、フェミニズムの文脈で何が自然と見なされるのかという疑問は、「自然生殖の人間に代わって人造（人工の）人間を作るための革命的な生態学的プログラム」**3**の延長線上にあると論じた。ファイアストーンはさらに、「人工生殖は本質的に人間性を奪うものではない。少なくとも、選択肢の拡大は太古からの母性という価値観を根底から見直すことにつながる」**4**と主張。ファイアストーンにとって、現在AI技術を使ってなされている人工生殖や産児制限を思い描くことは悪夢を見るようなものだったに違いないが、こうした環境でもわたしたちは思索したり、生態学的なフェミニズム革命に取り組んだりすることができ、それは「人間としての出産と生殖の基本的関係における質的变化」**5**を意味すると論じた。

50年近くを経てふり返ると、この問題に関するイデオロギー論争は発作的だったように見える。すでに潜在的な技術が存在してもタブーとされる異種間の有性生殖からクローン技術まで、進歩主義者がリベラル有性学と並んで近年推進する合成生物学から技術によって生殖に関する性差をなくすトランスヒューマン（超人）願望まで、自然保護へと急速に主張を変えつつあるエコフェミニズムから失われた自然との共生を取り戻そうとする習慣や政策まで、セックスと生殖の関係は政治論争の渦中にあり、この問題は今にも混乱を引き起こしかねない、むき出しであると同時に覆い隠されているダークルームなのである。

クロミウム・バウアー

ミシェル・フーコーが『性の歴史』に記した有名なくだりのように、「現代社会の特徴は、実は、セックスを陰の存在に押しやったことではなく、際限なくセックスを話題にすることに腐心した一方で秘め事として扱ったことにある」。**6**きわめて個別的と見なされる身体的体験の境界領域としての性欲は、歴史的に肉体という形で違いの信頼を培う決定的手段だった。そのため、近現代の想像の世界で、個別化される真実の究極の形になり、今日に至っては、インセル（非自発的独身者）からエコセクシャル（環境保護に熱心な独身者）まで、セックスボット（セックスパートナーロボット）からテレディルドニクス（遠隔者同士のバーチャル空間セックス）まで、どこまでも個々人の志向に合わせて広がりを見せている。

この点に関して、バイオポリティクス（生政治）の出現や存続を議論したり検討したりしている場所は、セックスの領域以外どこにもない。バイオポリティクスとは、政治への「生」の明

白な内在によって現代国家やその統制的・経済的手法を動かし、生物学的な生と国家の間に新たな関係が構築され、身体を育み増やし「生を秩序」化する政治体制である。**7**政治と経済の中心で生物学的生を再配置することは、そこで生きる者を科学的・社会的に監視する苛酷な世界をもたらし、新しい知識や介入を広範囲で押し付ける。生政治の重要な視点として、生物学的な（従来の被支配者ではない）個々人に対する決定が、現代政治とはなんぞやという初歩的定義として役立つと認識していることがある。とくに重要なのは、民主主義国家をはじめとする生の政治体制が、資本主義に豊富な労働力をもたらすと同時に政治の介入や排除のルールとして機能することである。そこでの性的行為は、西洋的「エピステーメー」ではタブー視される行為によって物的に蓄積する抑制された無意識を具現化する特別な才能であった。だがその点で、性的行為は無意識に支配を繰り返したり、生を資本主義の主要商品にしたり、人体の商品化を媒介したりもする。

この論理を掘り下げた新自由主義政策は、生産と生殖の間の旧来の乖離を徐々に統合していった。哲学者のマイケル・フェーヘルが主張するように、人的資本は主要な被支配形態になりやすい。**8**被支配的であると同時に経済的でもあるこうした変容は、価値形態を変えることによって生殖する生（金で買えないはずの生殖可能な年齢の生）に対する支配を無効化する。言い換えるなら、デジタル資本主義の産物である新しい生命形態、生命体、パートナー、身体には（遺伝子組み換えからセックスドールまで）ほぼ無限の形態があると同時に権力地図としても読み取れ、そこでのわたしたちは加速する形態学的、感情的、性的、生化学的、恋愛志向の、超越的、幻想的な変異の対象になる。作家で哲学者のポール・B・プレシアードが主張するように、「肉体、セックス、アイデンティティの政治的・技術的管理という軸を用いて、前世紀中の工業生産の変容を示す新たな地図を描くことが可能」なのである。**9**この軸は、実は資本主義的な生殖に付きものの制限的・美的な生の制御にすぎないのだが、「生の変化」の美的実践である自由な生に対する現代自由主義的探究を「身体政治学的」**10**に分析する必要があると主張する。同時に、この軸は揺るぎないこの概念への評価としての性的行為を探究する道しるべとして、この問題を評価する指針にもなっている。

アビス・クリエーションズ

2017年にアビス・クリエーションズ社がAI搭載セックスロボット「ハーモニー」を発表すると議論が巻き起こり、セックスボットは危険な権力構造の構築を促進・再生産し、女性と子どもを性的対象としその搾取を正当化する危険があると主張する者と、セラピー効果や搾取から解放する働きもあると主張する者へと二極化した。しかしながら、どちらの主張も、わたしたちのセックスへの欲求や行為は本能的もしくは自然なものであると主張することで、セックスボットが人工物とのセックスや欲求の豊かな表現でもあることを見過ごしている。セックスボットは、生身の体と人工的な体の間で揺らぐ愛／セックス／欲求を具現化する「非人間のパートナー」なのであり、愛（やセックス）とAIとの奇妙な関係の双方に作用するリビドー的経済活動を明白化したものなのだ。だからこそ、存在論的空間に内在するにもかかわらず隠されるセックスや欲求の構図を意味論的アビス（割れ目）として具現化するのだ。

愛は歴史的に、理性と正当化がせめぎ合うアビスの類いを具現化してきた。究極の愛は超選択的な存在であるという点で条件付きであることが多い。対照的に、ロマンティックな愛の特徴は、情熱と決断の間で思いが揺れ動くことである。片や、愛はきわめて私的なものであり、きわめて推論的な感覚的状态であり、どんな地図や羅針盤でも見つからないダークルームである。その一方で、愛は必然的に社交という共有形態であるが、そうした共有は本来私的もしくは排他的である。愛は、性的志向やジェンダーと同じく、概念とまでは言わないまでも実体のないものであり、さまざまな論法や規範で規定され構築される。目に見えたり話題にしたりしない愛やセックスは、目に見えたり話題にしたりするもので成り立っている。つまり、愛とセックスは、私的と公的、口に出すことと出さないこと、推論的なものと非推論的なものの境界を揺るがすものであり、思考と感覚、連続性と非連続性、束縛と解放、快感と苦痛、結合と阻害のどちらの原点でもある。したがって、愛は、政治的主観性の基本単位、つまり理性的・政治的関与が最終的に試される体制を選択・構築する感情に他ならない。

哲学的・芸術的・政治的に愛・セックス・生殖を組み合わせるマッピングすることの効用は、この「アビス」の道案内をする点に集約され、愛とセックスの合理的説明への抵抗の仕組みを評価する困難な取り組みに真っ向から取り組むことで、わたしたちが理性で理解するものを再定義する一助になる。

- 1 Herman Hesse, *The Glass Bead Game* (1943), Translated by Mervyn Savill and Clara and Richard Winston (London: Holt, Rinehart and Winston), 1949. (ヘルマン・ヘッセ『ガラス玉演戯』、新潮社、1958年、高橋健二他訳)
- 2 Shulamith Firestone, *The Dialectic of Sex: The Case for Feminist Revolution* (New York: Bentham Books, 1970), 72. (シュラミス・ファイアストーン『性の弁証法——女性解放革命の場合』評論社、1972年、林弘子訳)
- 3 Firestone, *The Dialectic of Sex*, 192. (ファイアストーン『性の弁証法』)
- 4 Firestone, *The Dialectic of Sex*, 199. (ファイアストーン『性の弁証法』)
- 5 Firestone, *The Dialectic of Sex*, 201. (ファイアストーン『性の弁証法』)
- 6 Michel Foucault, *The Will to Knowledge: The History of Sexuality*, vol. I (1978), trans. Robert Hurley (London: Penguin, 1990), 35. (ミシェル・フーコー『性の歴史』第一巻「知への意志」新潮社、1986年、渡辺守章訳)
- 7 Foucault, *The Will to knowledge*, 138. (ミシェル・フーコー「知への意志」)
- 8 Michael Feher, "Self-Appreciation; or, The Aspirations of Human-Capital," *Public Culture* 21, no.1 (Winter 2009): 21-41.
- 9 Paul B. Preciado, *Testo Junkie: Sex, Drugs, and Biopolitics in the Pharmacopornographic Era* (2008), trans. Bruce Benderson (New York: The Feminist Press, 2013), 25.
- 10 これはミシェル・フーコーの“*somato-pouvoir*” (身体的権力) という考え方を指す。Michel Foucault, *Surveiller et punir: Naissance de la prison* (Paris: Gallimard, 1975)を参照 (ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社、1977年、田村俣訳)。

